

シンポジウム「子どもたちの明日のために」

子どもたちの未来と安全を考える教育シンポジウム「子どもたちの明日のために」(毎日新聞社主催、日本教職員組合協力)が今月5日、約400人の聴衆を集め東京都内で開かれた。小柴昌俊さんの基調講演の後、4人のパネリストが「子供たちを守るには「教育と競争主義」などをテーマに熱心に語り合った。(本文中、敬称略)

- ◇パネリスト◇
 - 重松 清 (作家)
 - 馳 浩 (副文部科学相)
 - 佐藤 学 (東大教育学部長)
 - マリ・クリスティーン (異文化コミュニケーター)
- ◇オブザーバー◇
 - 森越康雄 (日本教職員組合中央執行委員長)
 - ◇コーディネーター◇
 - 河野俊史 (毎日新聞東京本社社会部長)

写真はいずれも馬場理沙

「安全」地域ぐるみ

影落とす相互不信 重松 住民自治教育にも 馳

河野 昨年来、広島や栃木、重松 安全や安心が成立するあるいは京都などでショックを受ける大前提に必要なものは、信



佐藤学氏 馳浩氏 重松清氏

に値する。だからこそ僕たちは何かを安全、安心だとみなして、それが裏切られてしまう事件が多い。

子どもが通学の途中に事件に巻き込まれることが相次いで、ルポルタージュやドキュメンタリーの仕事で全国あちこち歩いてみますと、さまざまな看板が増えました。その看板というのは、不審者に気をつけようとかですね。先週、僕は大阪で、1本ドキュメンタリーを撮ってきたんです。

ある校門の前に「不審者を追い出せ」という看板があったんです。「不審者」の段階ですぐに排除するという発想になったら、自分たちの町の人々に対する不信感を、結局子どもたちに植え付けてしまう。これは不幸な話だと思う。町を歩いていると、相互不信というものの子どもたちにも影を写しているんじゃないかという印象です。

住民自治という考え方も、教育の現場が必要ではないかと思っています。私の地元は金沢ですが、ひとつ紹介

重松

「今日も頑張ろうね」と声掛け運動をされた。1人で始めたら今では七十数人参加している。「どうやってこんなに集めたんですかと聞いたら、「一人一人を説得して、交代してやっているんですよ。こういう盛り上がりというのを教育行政と合体をさせて、子どもたちには、一事件もあるけれども、皆さんのことを思ってくれる大人もいるんだよ」と伝えたい。そこへ文部科学省として後押しをできるような形をとっていくのがいいんじゃないかなと思っています。

マリ 私には日本の学校には行ったことがなくて、幼稚園だけ日本で過ごして、それからドイツとアメリカ、フランス、タイで小学校、中学校、高校へ行きました。大学で日本に帰ってきました。

日本に帰ってきて一番びっくりしたことは、親せきが1人で学校に行っていたことです。海外では1人で学校に行

ったことがなくて、スクールバスが迎えに来て、門で学校の先生方が迎え入れてくれて、帰るバスに乗るまで見届けてくれて、家に帰ると親がバス停で待っている。それはなぜかと言いますと、子どもの安全を守るということが前提だったと思うんです。日本はとても安全な国だっただけに、外国の方が見ると本当にびっくりします。

子どもが1人で町を歩けるという、このすばらしい安全だと思えます。子どもたちが安全で安心して伸びやかに暮らせる空間が、もうほとんどなくなっている。この現実を問題にすべきます。

確かに日本の社会というのは安全でしたし、それから子どもが1人で通える社会だったんだけれども、今は違ってきたというところは、その通りだと思えます。子どもたちが安全で安心して伸びやかに暮らせる空間が、もうほとんどなくなっている。この現実を問題にすべきます。

左面につづく



真剣な表情で聴き入る参加者

右面からつづく

河野 次に学力低下の問題を考えると、詰め込み教育の反省で、またゆとり教育が、見直し時期を迎えています。

「ゆとり教育」という言葉の定義を、もう一度歴史的に振り返ってみたい。1970・80年代という言葉を覚えておられると思います。小学校で授業が大体理解できるのは7割、中学校で5割、高校で3割と言われた時代がありました。それで基礎基本をしっかり身につけようとなった。そのためには十分に時間をとり基礎基本をやりましょう。

これはゆとり教育のはしりであり、当然、身につけたものを社会に出るから、やはり生かせないといけない。これは総合的な学習の時間につながった。また、学習指導要領の3割削減というところにつながった。

そして、学力低下というところでも数字で見ても、数学の点数、理科の点数、国際的にも落ちたんじゃないかと。これは、教育の成果を数字で見すぎんじゃないかなという印象を受けてます。ゆとり教育はすべてだめという評価だめだし、ゆとり教育の現状のままでいいとも

教育に「志」今こそ



マリ・クリスティーン氏



森越康雄氏

2年生のレベルで見えています。世界平均で校外の学習時間は3時間ですけれども、日本はその半分くらいですね。最低レベルです。高校生に至っては、4割がゼロです。なぜ日本の子どもたちは小学校高学年から中学校、さらに高校にかけて、どんどん学ぶことから逃げ出してしまっているのか。学びに絶望してしまっているのか。それが最大の問題です。

段私たちが生活している中で、例えば子どもが外を見た時に、なぜお月さまはどちら側からしか見えないのという疑問を学校に持ち帰って、先生がその疑問の周りにカリキュラムを作って、その子が楽しくこれを学べるようにする。そうすることで、基礎知識が教えやすくなる、子どもにとっては興味あるところから勉強するので記憶に残る知識となるという認識ですね。

河野 次に、教育における競争主義の問題を。佐藤 今の最大の問題だと考えます。教育の格差の拡大の問題です。手を打たないと大変なことになると、私は危機的に思っています。あるひとつのテーマを紹介したいのですが、負しい世帯であればあるほど、教育費が家計の6割近くを占めている。家族に資産がないと、その子が将来にわたって生きていくためには、しっかりとした教育をほ

「基礎見直す」「ゆとり」 馳 「学びから逃走」深刻 佐藤 疑問糸口に覚える マリ

私は思わないけれども、ゆとり教育の目指した定義というものは、もう一度理解し直しましょうよ。その上で、学力低下というけれども、点数の問題なのか。子どもが学ぼうとする意欲の問題なのか。

佐藤 日本の学力が、国際的に高い水準を維持しているが、国際的に低い水準を維持している

ことば事実です。と同時に、危機的な状況を迎えていることも事実ですね。この危機的

者を作り出す危険があります。学びの質の転換を図らない限り子どもたちは絶望して、どんどん学びから背を向けるでしょうし、本も読まなくなるでしょう。

マリ 最近アメリカの教育界に「組み立て教育」という定義が出てきています。普遍的な話になった。

河野 森越さん、今の格差の問題をお聞きになって、どんな感想をお持ちですか。森越 この前の教研集会で、毎日新聞が紹介しました

が、岩手出身の子どもが、看護師になりたいと病院に就職したけれども、月1回も休みがなかったのです。14時間働かせて、本当に給料が5万円という大変な状況の中で、辞めざるを得なくなった。その後支援があった、高校を卒業できたようだけれども、今、本当に子どもを大事にしようと、社会として支えているのか大変心配です。

したがって、私は下から積み上げていけるような制度をもっと大事にしてほしい。例えば親を愛さない、あるいは国を愛さないみたいなのは、愛というのはいらないかと思つております。

「見張る」より「見守る」

重松

河野 最後のまとめで、一言ずつお願いします。

重松 子どもを守る、守りたいというのは親も、みんなたぶん同じだと思います。その時にいちばん簡単なのは、見張るなんです。町の中の不審者を見つけて出して、見張る。あるいは子どもの行動を監視する。

この見張ると、見守るというのは、全然違うんじゃないかと思えます。学校で物を学ぶ目的というのは、やっぱり視野を広げることだと思うんです。識というものを僕自身も持ち

です。多様性を知ることが、受け入れていくことであってほしいんです。だから、それが排除の方向に走ることだと、みんな視界が狭まっていく。自分自身も心がけたいんです。けれども、いろんなものを受け入れていくために、僕たちは小学校、中学、高校と学んできたはずだし、大人として生きていくはずだと思っ

た。だから、排除したり差別したりという、いわゆる見張る感覚じゃなくて、見守る意識というものを僕自身も持ちたいなと思っています。佐藤 シンポジウムのタイトル「子どもたちの明日のために」私たちにできることとして、私たちが受け取って、提案したいと思

います。敗戦直後、日本は最も経済的に貧困で、社会全体が破綻状況でした。その日本において、教育改革を行いました。当時、財源が少なかった中、世界一の教育投資を行いました。新制中学が発足しました。このままだと、教育は崩壊すると思います。もう一度高い志を掲げよう。現在、日本は世界第2位の経済大国です。それなのに教育投資のGDP比は、OECD諸国の中で最低になっています。このままだと、教育は崩壊すると思います。もう一度高い志を掲げよう。現在、日本は世界第2位の経済大国です。それなのに教育投資のGDP比は、OECD諸国の中で最低になっています。このままだと、教育は崩壊すると思います。もう一度高い志を掲げよう。

格差や荒廃を実感

栃木県下野市、ピアノ教師、薄井祥子さん(61) (財源が不足した)終戦まもない時期、国があえて教育に破格の予算をつけていた。同じように今こそ子どものために高い志を掲げよう、という佐藤教授の話が印象に残った。事件が起き続ける子ども達の心、荒廃や教育の格差。戦後とは状況が全く違うと思っていたが、子どもを取り巻く環境の大変さを改めて感じました。

会場からは…

日本の常識 通用せぬ

「私」の部分が膨張

東京都北区、元会社員、嶋田信義さん(67) 中3と中1の2人の孫がおり、今の教育がどんな問題を抱えているかを知りたくて参加した。マリ・クリスティーンさんの話で、島国で通用する教育の常識が、外国では通用しないと知った。外国では「宗教」の授業で教えることを日本では道德でやっているが、不十分ではないか。子どもたちに命の大切さをもっと教えるべきだと思う。

東京都世田谷区、元小学校長、浅子昭三さん(77) 戦後間もない国会で文部官僚が「予算がない」と号泣した、という佐藤先生の話で昔の苦労を思い出した。地方でも新制中学スタートで教育関係者が苦労し、自殺者が何人も出ている。司馬遼太郎の言う通り、今の日本人は「私」の部分膨張させてきて社会がダメになってしまった。高度経済成長で物質的に豊かになりすぎたのだろう。



大勢の参加者を前に意見を述べるパネリストたち

もっと未来へ投資を

佐藤

日本語力も英語力も

マリ

来への投資です。敗戦直後に、お金がないんですと泣いても負けない志を持って改革を行わない限り、日本社会の未来はないと思います。せめてOECD平均のGDP比5.0% (日本は3.6%) の教育費の投資を表現させることです。これで大半の問題が解決すると思います。

きますし、世界がどんどん子どもたちにとって身近になり、考える力も広がっていくでしょう。そういう教育もしていただければと思います。マリ 母国語できちっとコミュニケーションができることを、人生において哲学を持つということの大切さを、教育を通じて伝えたいと思います。私は高校教員として、授業をしていて「あっ」と思ったことがあります。西行の辞世の歌、「願わくは、花の下にて、春死なん そのきさらぎの 望月のころ」というものです。西行法師がなぜ23歳で出家して人生を送ったか。子どもたちが目を醒かせて、聞くんでは。高校生が何かを感じているということを受け止めました。人は死ぬのであって、よい死に方をしたいと思えるような教育が必要だと思います。

また、マリさんは英語教育を頑張っておっしゃいましたが、僕は小学生における国語力の強化というものに、もっと力を注ぎたいな。学べば、名文とか、美文とか、音読というのはあると思うんですよ。国語力の強化について

マリ コミュニケーションができないということ、やっぱり自分の感情や、エモーションといふものを伝えることができないだけに、子どもたちが苦しんでいると思えます。ぜひそういう点では、日本語の言葉教育、それと英語教育をきちっとしていただきたいと思っています。コミュニケーションツールとしての英語をきちっと覚え、名文とか、美文とか、音読というのはあると思うんですよ。国語力の強化について